

冷徹な王子は、野蠻な異母弟に「雌」として溺愛される
く孕むまで終わらない王家の秘め事く

昼時、玉座の間は冷え切っていた。

英雄の凱旋だというのに、貴族どもはこれだから困る。俺が国境で血反吐を吐きながら戦っていた間、こいつらは暖かい館で美食を貪り、俺の噂話に興じていたのだろう。

俺は磨き上げられた大理石の床に映る自分を見下ろした。国境を侵略した蛮族どもを半年で討ち取り、返す足で帰国した。黒い革鎧は砂埃にまみれ、あちこちに返り血が染みついている。お世辞にもこの国の第二王子には見えない。

だが、それでいい。

俺がこの王宮に戻ってきた理由は、褒賞でも名誉でもない。

「…おもて面を上げよ」

頭上から氷柱を思わせる冷たい声がかけられた。その声を聞いた瞬間、背筋に甘い痺れが走る。

ゆっくりと視線を上げれば、北方の吹雪を思わせる美貌の青年が玉座に座っていた。

我が兄にして次期国王、ウルリック。

月光を紡いで織り上げたような麗しい銀髪。感情を凍らせ切った碧眼。薄い唇は真一文字に引き結ばれ、白皙の頬には一点の曇りもない。絶対的な美貌がそこにあった。

半年ぶりに見る兄は、記憶の中よりもさらに美しかった。

戦場で何度も思い出した顔。泥濘に膝をつき、敵の刃を受け止めながら、脳裏に浮かべていた顔。俺を正気に繋ぎとめていたのは、いつだってこの兄の姿だった。

（ああ……やっぱり綺麗だ）

身体が疼く。戦場で押し殺していた欲望が、兄の姿を見た途端に蘇ってくる。

（俺のモノにしたい……）

十年前、あの事件で一目惚れした。以来、ずっと兄が欲しかった。

異母兄？ 近親？ そんなもん知るか。この秀麗な美貌を俺の下で乱れさせたい。あの冷たい瞳を潤ませ、高貴な唇から甘い声を零させてやりたい。

こほん、と宰相の空咳で俺の意識は現実に戻された。

玉座の間に集まった貴族どもは、これみよがしにハンカチで鼻を押さえている。なかには扇で顔を隠し、露骨に顔をしかめている令嬢もいた。この数年、王国に攻め入る敵を返り討ちにしてきたが、それでも奴らに

はまだ俺が「下賤な犬」らしい。

母親が移民の踊り子というだけで、ずいぶんな態度だ。その踊り子の息子が血を流さなければ、お前たちの首はとくに蛮族の槍に突き刺されていたというのに。

ウルリックが玉座に座ったまま、感情の読めない声で告げる。

「西の国境における武功、大儀であった。蛮族の首領を討ち取ったと聞く」

ウルリックが細い指先を動かすと、侍従がうやうやしく俺の前に褒賞の剣を差し出してきた。立派な拵えの剣だが、実戦には向かない装飾品だ。剣を受け取れば、貴族どもがクスクスと失笑した。

下賤な血の第二王子には、剣の方がお似合いだとも思っているのか。勝手に言っている。

「今夜は王位継承の秘儀を控えているゆえ、手短に済ませよう。… ラ
ディム、貴様もこの国の王族だ。明日の戴冠式には必ず出席せよ。まず
は身を清めてこい。獣臭くてかなわん」
公然たる侮蔑に貴族たちが同調した。くすくすと耳障りな嘲笑が、玉座
の間を満たしていく。

ウルリックの冷淡な言葉が胸に突き刺さる――ウルリックの冷淡な言葉
が胸に突き刺さる――わけがない。

むしろ唇が吊り上がるのを抑えられなかった。

ウルリックは分かっている。

俺を遠ざけようとすればするほど、この身体の芯に火が点くことを。

「獣臭い」と罵るその声が、俺にはまるで挑発のように聞こえることを。
(そうやって俺を焚きつけるなよ)

下腹に溜まった熱が、じくりと疼いた。

いつもならここですぐさま去るが、『今日』は特別だ。

俺は侍従を押しやり、玉座に向かって駆けた。

「ラディム殿、殿下の御前ですぞ」

玉座に控えていた近衛兵たちがウルリックを守るように立ちはだかったが、戦場仕込みの殺気を当ててやれば一瞬で黙った。所詮は王宮で飼われている犬だ。本物の戦場を知らない連中に、俺を止められるわけがない。

ウルリックは眉根一つ変えやしない。氷のような美貌で俺を見据え、静かに告げた。

「相変わらず野犬のようだな」

「褒め言葉として受け取っておくよ」

俺は玉座の肘掛けに手をつき、ウルリックの手首を握り締めた。女のよ
うに細い手だった。上等な絹の手袋ごしに、兄の体温がうっすらと伝
わってくる。

この手で俺を抱きしめてくれたことは、一度もない。

俺はウルリックの頬に顔を寄せた。戦場帰りの血でも匂ったか、今日は
じめてウルリックが嫌悪をあらわにした。

「兄者と違って下賤な血が濃いもんでね。できれば冷たくて高貴な女を
抱いてから、継承の秘儀を見たい」

鼻を鳴らせば、北方の雪原で嗅いだような無機質な香りがした。ウル
リックの匂いだ。半年間、ずっと恋しかった。

「お前に股をひらくご令嬢がいるとは思えんな」

「さあ、どうだろうな」

俺はウルリックの碧眼をじっと覗き込んだ。

神秘的な輝きを放つ双眸。北の湖を閉じ込めたような蒼穹の瞳。その奥に、かすかな揺らぎを見つけた。

— 怯えだ。

第一王子として王位を継ぐことへの恐怖。国を率いる重圧。民を守る義務。王族として生まれた宿命を、兄は一人で背負おうとしている。

そのことが、たまらなく愛おしい。

そつと顎に手をやり、兄の顔を持ち上げた。絹のような銀髪が揺れる。息がかかるほどの近さで、ウルリックにだけ聞こえるように囁いた。

「なあ、兄者。俺がなぜ帰ってきたか、分かるか？」

「…武功を認められるためだろう」

「違う」

ウルリックの瞳が揺れた。

「王位が欲しいわけでもない。貴族どもに認められたいわけでもない。

俺が本当に欲しいのは――」

言葉を切り、兄の唇に視線を落とした。薄紅色の、柔らかそうな唇。何度夢に見たか分らない。

「…玉座じゃねえよ」

低く、熱を帯びた声で囁いた。

ウルリックの柳眉がピクリと跳ねた。氷の仮面が剥がれ、兄の顔にゆっくりと困惑が広がっていく。

「貴様、何を…」

さっきまでの隙のない態度とは大違いだ。わずかに頬を染め、瞳を泳がせる様子が子供っぽくて堪らない。

ああ、可愛い。この顔をもっと見てみたい。

だが、今日はここまでだ。

俺は口角を吊り上げて、名残惜しくもウルリックから離れた。兄の細い手首から指を離す瞬間、その肌がわずかに震えたのを見逃さなかった。両手をあげて降参のポーズを取れば、俺たちを取り囲んでいた近衛兵たちが引いた。貴族どもは顔面蒼白だ。第一王子に触れた不敬を責め立てたいのだろうか、ウルリックの御前だ。うかつには口を出せまい。

「ざっさと身を清めてまいりますよ。今日は兄上の晴れ舞台だからな」
さっそうと踵を返す。

「ラディム」

背後から、わずかに震えた声があった。

俺は振り返りたい衝動をこらえ、重厚な扉をこじ開けて広間から去った。

◆
大浴場には誰もいなかった。

当然だ。今夜はウルリックが継承の秘儀を控えている。神殿で神官長から王権を授かる秘儀だ。それがつつがなく終われば、明日は民衆の前で冠を戴く戴冠式となる。

戦場帰りの野犬と湯を共にしたがる物好きなどいるはずもない。

俺は湯船に身を沈め、長く息を吐いた。

熱い湯が戦場の疲労を溶かしていく。半年分の埃と血と硝煙の匂いが、ゆっくりと身体から剥がれ落ちていった。

目を閉じれば、先ほどの光景が瞼の裏に蘇る。

玉座に座るウルリック。月光を紡いだような銀髪。北の湖を閉じ込めた

碧眼。そして、俺の言葉に動揺して揺れたあの瞳。

（…俺が欲しいのは、玉座じゃねえよ）

あのとき、確かに兄者の仮面が剥がれた。ほんの一瞬だったが、氷の下に隠された素顔が垣間見えた。

あれをもっと見たい。

湯の中で拳を握りしめる。十年間、ずっと押し殺してきた思いが胸の奥で暴れている。

戦場では関係なかった。剣を振るい、敵を斬り、生き延びることだけを考えていれば、この熱を忘れていられた。だが王宮に戻った途端、全てが蘇ってくる。

ウルリックが欲しい。

あの氷のような兄を、俺だけのものにしたい。

湯船から上がり、用意されていた衣服に袖を通した。上等な絹の装束だ。これも蛮族どもから国境を守った褒章といったところか。

あるいは王族として、最低限の体裁は整えろという意味か。

鏡に映る自分を見やる。戦場で日に焼けた肌、あちこちに残る古傷。どう着飾ったところで、俺が「下賤な血」であることは隠しようがない。だが構わない。

俺が欲しいのは貴族どもの称賛じゃない。

兄者の、ウルリックの――。

「くそっ」

湯舟につかり過ぎたか。体内の熱が溜まり続けていた。

こんなことなら街に繰り出して、女のひとりでも抱いてくれば良かった。部屋に戻ると、予想通り扉の前に衛兵が立っていた。

二十歳そこそこか。俺を見た途端、露骨に緊張した顔になった。

「護衛ご苦労」

声をかけてやれば、衛兵は直立不動のまま答えた。

「は、はい。ラデーム殿下の護衛を仰せっております」

護衛、ね。

俺は肩をすくめた。護衛と言えば聞こえはいいが、要するに監視だ。継承の秘儀の最中に第二王子が何か企んでいないか見張れと、誰かに命じられたのだろう。宰相か、あるいはウルリック本人か。

「かたいな。そう構えるなよ」

俺は壁に備え付けの棚から酒瓶を手にとった。

琥珀色の蒸留酒だ。俺が出征している間も、誰かがこの部屋を管理してくれてたらしい。封は斬られていなかった。

衛兵は扉の前で突っ立ったままだ。俺は杯を二つ取り出し、片方を若い衛兵に差し出した。

「どうせ兄者がぶじ継承の秘儀を終えるまでずっと暇なんだ。付き合え」

「じ、しかし、任務中ですので…」

「祝いの席で酒を断るほうが無礼だろ？」

強引に杯を握らせる。衛兵は困惑した顔で杯を見つめていたが、俺が構わず酒を注いでやると、観念したように杯を持ち上げた。

「…ウルリック殿下の戴冠に」

「ああ。兄者の戴冠に」

杯を合わせ、一息に煽る。喉を焼く熱が、腹の底に落ちていった。

エーリックと名乗った若い衛兵は一口だけ飲んで咳き込んでいる。まだ酒

に慣れていないらしい。戦場では考えられない初々しさだ。

「エーリック。近衛兵になって何年だ」

「三年になります」

「三年か……」

つまり、俺が西方へ出征する少し前に入隊したわけだ。玉座の間での俺の振る舞いを、こいつがどう思っているかは分からない。だが、敵意は感じない。純粹に任務を遂行しようとしているだけに見える。

「あの……失礼ながら、殿下はウルリック殿下と仲がよろしいのですか？」

思わず笑いが漏れた。

「仲がいい、ね」

杯を傾け、琥珀色の液体を眺める。

俺と兄者の関係は、傍目には最悪に見えるだろう。生まれながらに王位を約束された第一王子と、妾腹の第二王子。兄者は俺を「野犬」と呼び、俺は兄者を挑発する。玉座の間でのやり取りを見れば、犬猿の仲だと思うのが普通だ。

だが。

「仲がいいかどうかは知らん。ただ俺は兄者を……」

そこで言葉を切った。

この若い衛兵に何を話しているのだ。

酒でも回ったか。らしくもない。

「ラディム殿下？」

「いいや、なんでもない。お前は自分の任務を果たせよ。もしもあとで上司に怒られたら、こう言っとけよ。野犬に酒を飲まされたってな」

エーリックが唇をひん曲げた。

「そのような物言いは国の英雄たる殿下らしくありません。ご自分を卑下するなど――」

エーリックとの口論は、突然のノックで途切れた。

「誰だ、こんな時間に……」

今夜は神殿の奥深くで、ウルリックが神官長から継承の秘儀を授けられる神聖な夜だ。

かまびすしい貴族たちだって、儀式の成功を願って屋敷にひきこもる。

俺は腰にナイフがある事を確認しながら、エーリックとともに扉へ駆け寄った。

そこに立っていたのは――



夜、松明の炎が揺れていた。

ウルリックがこの場所に足を踏み入れるのは、第一王子として生まれて初めてのことだった。王城の地下深くに広がる巨大な空洞、通称「始祖の洞」。

天井は闇に溶けて見えず、岩壁には苔むした古代文字がびっしりと空洞全体に刻まれていた。

王国が生まれる遙か昔の時代から変わらぬ空気が、ウルリックの頬を撫でていった。

大空洞の中央には、粗削りの石で組まれた寝台がひとつ。その周囲を囲むように、獣の頭蓋骨や風化した供物が並んでいた。

王宮の華やかさとは対極にある、どこか無骨で禍々しい光景だった。

「…神官長」

私は傍らに立つ老人を睨みつけた。

「継承の儀とは、神殿で祈りを捧げ、王権の象徴たる神器を授かるものではなかったのか？」

大空洞には寝台が一つ。それだけだ。

同行した神官長の手には錫杖が一振り。これで一体どうやって秘儀を行うというのか。

神官長は深く皺の刻まれた顔で、静かに私を見返してきた。齢八十を超えた老骨だが、その眼光だけは異様に鋭かった。

「それは民に伝える『表の儀式』でございます」

「表？」

嫌な予感がした。

それを裏付ける事実がもう一つ。私は己の身体を見下ろした。

まっとっているのは儀式用の薄いローブ一枚。松明の灯りに乳首が透けて見えるほど薄い。

侍従に着替えさせられた時は、儀式用の正装と思っていたが、神官長の話を聞いた今、違う意図が見えてきた。

まるで私が誰かに捧げられる供物のような――

神官長が杖を突きながら、ゆっくりと石の寝台へ歩み寄った。

「これは代々、神官長のみにも口伝で伝えられてきた秘儀でございます。

先代陛下ですら、殿下に伝えることは禁じられてきました」

「なぜ？」

「言えれば逃げる者が出ますゆえ」

その言葉に、背筋が凍った。

いいや、私はこの国の王を継ぐもの。真の継承の秘儀がどうであれ、逃げ出すつもりは毛頭ない。

私は爪が食い込むほど自分の手首を握り締めた。

「…どういう意味だ」

神官長は壁に刻まれた古代文字を指さした。文字は薄れてはいるが、天井にも刻まれているようだった。

「殿下は『王』とは何とされますか？」

「国を統べる者だ。民を守り、国土を治める責務を負う」

第一王子として生まれてからずっと父や母に教え込まれてきた。

問題はなぜ今、神官長は分かり切ったことを訊くのか？

「それは王の『役割』、王の『本質』ではない」

老人の声が、洞窟にこだました。

『我が国の『王』とは――国を守る『聖霊』を生み出す母体のこと』

『…なんだと？』

『ここ数年、蛮族どもの侵略が増えたのは『聖霊』の力が弱まった証。

聖霊を再びこの地に呼び込むには、王族の胎内でのみ錬成される『聖霊結晶』を作らねばなりません――聖霊結晶。

聞いたことのない言葉だった。だが、神官長の言葉の意味するところは、おぞましいほど明確に伝わってきた。

『まさか…』

『…『王』となる者はその身に国で最も強き雄の種を受け入れ、国母となるのです』

血の気が引いていくのが分かった。

「この…私が、国母だと…？」

声が震えた。己の身体を抱きしめる。薄布越しに、自分の体温が急速に下がっていくのを感じた。

「戯言を！ 私は男だ、子など産めるわけが――」

「聖霊結晶は、通常の出産とは違います。王族の血と雄の種を媒介に、胎内で凝縮される魔力塊にございます」

神官長は淡々と続けた。まるで天気の話でもするかのように。

「先代の王――殿下の父君もまた、同じ秘儀を経て王となりました」

「父上が…」

目眩がした。

あの厳格だった父が、威厳に満ちた王がこの洞窟で、何者かに身体を開いたというのか。

「殿下のお母上が早世されたのも、そのためにございます。聖霊結晶を宿した王は、一人の女との間に二人の子を成すことが難しくなる。それゆえ側室との間にラディム殿下を――」

「もういい」

私は片手を上げて神官長の言葉を遮った。

「黙れ。聞きたくない」

頭が割れそうだった。継承の儀とは、こんな屈辱的な儀式だったのか。だが、神官長は容赦なく続けた。

「残念ながら、もう後戻りはできません。聖霊の加護なくして、この国は滅びます。西の蛮族も、南の帝国も我が国を狙っておる。殿下が国母とならねば、民は死に絶えましょう」

父も同じように、こんな選択肢を迫られたのだろうか。

羞恥と理不尽極まりない、秘儀を受け入れたというのか。

私は両手を爪が食いこむほどきつく握り締めた。痛みなどこの恥辱の前では感じなかった。

長い、ながい沈黙の末、私は顔を上げた。

「いいだろう。それで私はどんな化け物とまぐわえばいいのだ？」

最強の雄と言うからには、人ではなく獣だろう。あるいは人語を解する魔獣か。

王族として、第一王子として生を受けたからには、ここで逃げるわけにはいかなかった。

「ああ、来られましたな……」

神官長が大空洞の入口を指し示した。薄闇の向こうからゆっくりと近づく足音が聞こえた。

男の足音が一つ、どうやら人間ではあるらしい。

ふとその足が止まる。薄闇から聞こえてきた声に、今度こそ私の心臓は凍り付いた。

「よう、兄者」

聞き慣れた声だった。そしてこの大空洞で絶対に聞きたくなかった声でもあった。

一步遅れて、薄闇から『彼』は姿を現した。

ラデームだった。

胸元を大きくはだけたシャツに、簡素なズボン。戦場から戻ったばかりとは思えぬほど、その肉体は精悍に引き締まっている。日に焼けた褐色の肌に、古傷がいくつも刻まれていた。

浴場で身を清めたのだろう。戦場で蓄えられた無精ひげが綺麗にそり落

とされ、年齢相応の幼さを取り戻していた。

「なぜ…お前が、ここに…」

「神官長の使いに手紙をもらってね」

ラディムは肩をすくめ、ゆっくりと近づいてきた。

私の目の前に立つ。

先ほどまでの血と埃の匂いは消え、代わりに雄の体臭がほのかに漂っていた。

「最強の男の『種』が必要なんだって？」

その言葉に、全身が総毛立った。

「まさか、『最も強い雄』とは…」

「西の蛮族を半年で平定なされた英雄。この国で今、最も強い雄でありましょう」

神官長が淡々と事実を述べていく。

ラディムの太い指に顎を上向かされる。

松明に照らされた黒い瞳が、ねっとり私の身体をたどっていく。

「！」

ラディムの指を払いのけて、両手で胸元を隠す。こんな薄布一枚の肌よりも恥ずかしい姿を弟に見られたくはなかった。

ラディムの唇が、三日月のように歪んだ。

「お望みの国の礎になれるんだろ？ 良かったじゃないか、兄者」

皮肉と、そしてそれ以上の熱が滲んだ声だった。

玉座の間でラディムに囁かれた言葉が蘇る。

『俺が欲しいのは、玉座じゃねえよ』

嘘であってほしいと思った。

顔を合わせるたび、いつも熱っぽい眼差しを送ってきたのは、私に弟と認められたいからだと思っていたのに、よもや――

「殿下、国のためにございます。ご決断を」

神官長は深く頭を垂れた。だが、その声に済まなさは微塵もなかった。

「ふざけるな」

声が大空洞に反響した。松明の炎がかすかに揺れる。

「よりによって……異母弟だぞ。貴様は弟に私を……っ」

それ以上先は口にしたくもなかった。

「嫌か？」

背後から、低い声が降ってきた。

振り返る間もなく、肩に手を置かれた。大きく、熱い手。戦場で剣を振るい続けてきた、武骨な手だった。

「…っ、私に触れるな」

「いいのか？」

ラディムは私の耳元に唇を寄せ、囁いた。

「国を守れなくなるぞ」

「…！ 脅しているのか…？」

「いいや、俺はただ事実を言っているだけだ」

ラディムの吐息が、耳朶をくすぐる。背筋に怖気が走った。

「兄者が俺を拒めば、聖霊結晶は生まれない。聖霊の加護は失われ、この国は蛮族どもの餌食になる。それでいいなら、俺は今すぐここを出ていく」

「… …」

「どうする？ ウルリック」

答えられなかった。

国のために。民のために。王族として生まれた責務。それを果たすためなら、私は何でもするつもりだった。

だが、まさか――弟に身体を差し出すことになるとは。

「秘儀は秘儀にございます」

神官長の声が、遠くから聞こえた。

「私はすべてが終わるまで、洞の外に控えておりますゆえ。どうか、国のためにお励みください」

老人は深々と頭を下げると、入口へと消えていった。

重い石扉が閉まる音が、大空洞に響き渡った。

完全な密室。

逃げ場はない。

「さて」

ラディムの手が、肩から首筋へと滑り落ちてきた。

「待て…っ」

私は咄嗟に身を翻し、ラディムから離れようとした。だが、腕を掴まれ、強引に引き寄せられる。

「離せ…っ！」

「暴れるなよ、怪我をする」

背後から抱きしめられた。逃れようともがいたが、ラディムの腕は鉄のように硬く、びくともしない。毛を逆立てた猫のように暴れても、この男の膂力には敵わなかった。

「っ…っ！」

不意に、うなじに熱い感触が押し当てられた。

ラディムの唇だ。柔らかく、そして執拗に、うなじの皮膚を吸い上げてくる。

「や、やめ…っ」

声が裏返った。全身に鳥肌が立つ。こんな場所に触れられたことなど、生まれて一度もなかった。

「いい声だ」

ラディムが笑った。低く、熱っぽい声で。

「ずっと聞きたかった。兄者のそういう声」

「狂って…いる…」

「ああ、狂ってる」

ラディムは私の身体を反転させ、正面から向き合った。

その顔を見て、私は恐怖した。

熱に浮かされた瞳、紅潮した頬、唇は薄く開かれ、荒い息遣いが漏れていた。

これは、獣の顔だ。

獲物を前に舌なめずりする獣の顔だった。

「夢みたいだ」

ラディムが呟いた。

「ずっと、ずっと夢に見てた。兄者を俺のものにする夢をな」

「ラディム……よせ……っ」

「十年だ。十年間、ずっと我慢してきた」

ラディムの手が、私の顎を持ち上げた。逃げられない。この狂気の瞳から、目を逸らすことすらできない。

「もう待てない」

唇が重なった。

深く、貪るように。

抵抗する間もなく、肉厚な舌が侵入してくる。口腔を蹂躪され、息がでない。意識が白く塗りつぶされていく。

（私は、この男に――）

松明の炎が揺れ、二つの影を洞窟の壁に映し出していた。



視界が揺れる。

私は冷たい寝台に運ばれ、仰向けにさせられた。

すぐさまラディムの巨体が覆いかぶさってきて、跳ね起きることもでき